



<教育目標>

英知の風かおり 友愛の情ふかく 精励の志つねに

中野中学校だより

平成 28 年 9 月 1 日発行

No. 7 校長 矢口 仁

たった一人のオリンピック — ボートにかけた青春 — 校長 矢口 仁

買い物の残暑の傘を折りたたむ 長峰 勇

前期後半の活動が始まりました。生活習慣を夏休み前の規則的なものに戻し、授業・学校行事・部活動等に自分の力を存分に発揮してほしいと思います。

今年の夏休み、リオデジャネイロ・オリンピックに熱中した人が多かったのではないのでしょうか？感動的な場面が多々あり、私はテレビを見ながら、何度も涙を流しました。

その中で、カヌー競技でオリンピック史上、日本で初めてメダルを取った羽田卓也さんの話に関心を持ちました。高校卒業後、単身でスロバキアに留学し、一人で黙々と努力を重ね、今回の快挙につながったということです。その話から、なぜか昔のボート選手、幻のオリンピック代表だった津田真男さんの話を思い出しました。



津田さんは、東教大学附属高校（現筑波大附属高校）でサッカーに熱中していました。東大進学を目指しましたが、結局二浪して東海大学へ入学、受験失敗の挫折感等から麻雀などに明け暮れました。そんな中、周囲の友人が社会に出て活躍するのを見て一念発起。大学3年生、23歳の時に、一年半後のモントリオール・オリンピックに出て、金メダルを目指そうという大胆な決意をします。

可能な種目を考えたところ、一人でもできるボートのシングル・スカルに決め、練習を始めました。アルバイトで競技にかかる費用を稼ぎながら、練習とトレーニングを重ね、三か月後の全日本選手権で、3位に入賞します。

翌年、オリンピック直前の4月の大会で見事初優勝し、代表になる期待がかかりましたが、代表選手はエイトだけという漕艇協会の方針のため、選ばれませんでした。

そこで挫折せず、次のモスクワ・オリンピックを目指して、津田さんは仕事の合間にさらに練習を重ねます。国内の大会で18連勝という素晴らしい成績を残しました。

5時起床で2時間練習、仕事を終えて夕方6時過ぎから8時まで練習……こんな生活を続け、夢だったモスクワ・オリンピック代表の座を射止めたのでした。しかし、日本がオリンピックをボイコットしたため、幻の代表に終わってしまったのです。

津田さんは語ります。「自分のためにやってきたんです。国のためでも、大学のためでもなかった。自分のため、ただそれだけです。」

山際淳司著『スローカーブを、もう一球「たった一人のオリンピック」』より

自分で目標を定め、その目標達成を目指し、自分のため、自分を変えるため、自分を成長させるために努力を続けることには大きな価値があると思います。